

大森—尋常性狼瘡ノ「レントゲン」治驗竝ニ「レントゲン」火傷ニ就テ

四九〇

尋常性狼瘡ノ「レントゲン」治驗 竝ニ「レントゲン」火傷ニ就テ

醫學士 大 森 大 亮

千八百九十五年 X Strahlen ノレントゲン Röntgen 氏ニヨリ發見セラル、ヤ翌千八百九十六年フロイド Freund 氏直チニ之ヲ醫療ニ應用シ爾來其ノ效果ノ認メラル、ヤ我醫界ハ爭フテ之ヲ歡迎シ漸次其ノ偉大ナル權威ヲ示スニ至レリ從テ東西ノ學者之ガ研究ニ腐心シ其ノ發表セル業績ハ多ク此ニ關シ、其ノ應用セラル、範圍モ益々擴大スルニ至レリ。

「レントゲン」線ノ皮膚科ニ於テ應用セラル、ハ其ノ始メフロイド氏ノ有毛性母斑ニ試用セラレシヲ濫觴トシ亞テ Schiff 氏キュンメル Kümme 氏ハ尋常性狼瘡、チームゼン Niemann 氏ハ鱗屑癬(乾癬)、シッフ氏ハ紅斑性狼瘡、フロインド氏ハ黃癬及尋常性毛瘡ニ、ユタッシ Jussay 氏ハ血管腫ニ、ハーン Hahn 氏ハ慢性濕疹ニ應用シ各々相當ノ效果ヲ認メ從ツテ今日ニ於テ漸次各種ノ皮膚病ニ之ヲ施スニ至リ。就中肉腫、癌腫、狼瘡等今日迄頗ル其ノ治療ニ困難セル疾患ニ於テ之ニ對シ外科的療法ヲ施シ得ズ或ハ外科的療法ノ適當セザル場合ニ「レントゲン」線ニヨリテ往々著大ノ效果ヲ擧ゲ得ルニ至レル(向ヒツ、アルハ)誠ハニ大ナル人類ノ幸福ナリト云フベシ。

抑モ此ノ「レントゲン」線ノ皮膚ニ對ス生物學的作用ニハ種々ナルモノアリ即チ照射局部ノ紅斑、色素沈着、脱毛、水泡、潰瘍、尙ホ續テ角化、萎縮、癩痕形成等ニシテ所謂皮膚ノ「レントゲン」反應 Röntgenreaction ニ因ルモノニシテ極メテ稀ニハ「レントゲン」癌 Röntgenkrebnorn ヲ來スコトアリ、而シテ之等生物學的作用ハ「レントゲン」線ノ量及質竝ニ生活細胞ノ感受性 Radiensfähigkeit ニ關係アルヤ勿論ナリトス。此ノ感受性ハ悪性腫瘍細胞ノ如キ幼弱ナル胚種細胞特ニ鋭敏ニシテ即チ之等ノ細胞ハ主ニ原形質ニ富ミ其ノ新陳代謝機旺盛ニシテ盛ニ核分裂ノ状態ニアルモノナレバ從テ其ノ抵抗弱ク容易ニ壊死ニ陥リ破壊セラル、モノナリ、之ニ反シテ感受性遲鈍ナル老成細胞

ハ其ノ質及量ノ適當セル場合ニハ殆ド何等ノ病的變化ヲ來サズ若シ又多少ノ變化ヲ來シタリトスルモ或一定時後ハ容易ニ再ビ恢復セラレテ些ノ障害ヲ殘スコトナシ之レ「レントゲン」線ヲ醫療ニ應用シ得ル所以ナリトス。

吾人ハ岡山縣病院ニ於テ浦野ドクトルヲ煩ハシテ皮膚ノ種々ナル疾患ニ「レントゲン」療法ヲ施シテ大ナル效果ヲ認メツ、アリ就中尋常性狼瘡、皮膚疣狀結核ニ對シテ著明ナル效果ヲ擧ゲ得タルハ頗ル快心ノ事ニ屬ス、依テ茲ニ最近著效ヲ奏シタル一例ヲ略述シ實地醫家ノ參考ニ供セント欲ス。然レドモ尙ホ茲ニ附記セザルベカラザルハ上記ノ「レントゲン」皮膚炎 Röntgendumatitis ナリ、「レントゲン」皮膚炎ハ「レントゲン」線ヲ用ユル時ニ起ル生物的變化ニシテ其ノ輕度ノモノハ日常ノ使用ニ際シ常ニ看ル所ノモノニシテ決シテ恐ルベキモノニアラザレドモ、唯其ノ甚シキモノニ至リテハ「レントゲン」火傷 Röntgenverbrennung ヲ來シ組織ノ壞死ヲ呈シ皮膚ノ深層迄ヲ犯シテ容易ニ治セザルモノアリ之レ「レントゲン」線使用ニ際シ注意スベキ不快ナル副作用トナス、然レドモ此ノ「レントゲン」火傷ハ常ニ起ル處ノモノニアラズシテ使用法ノ不注意ナル場合即チ強大ナル紅斑量、長時間ノ照射等ニ原因スルモノナルモ尙ホ或極メテ稀ナル特異質ヲ有スル患者ニ總テノ注意ヲ拂ヒ、極メテ僅カノ紅斑量ヲ使用セルニ拘ハラズ此ノ「レントゲン」火傷ヲ招來スルコトアルモノ、如シ、勿論「レントゲン」特異質 Röntgendiostykrasie ノ存在ヲ疑フ人或ハ全ク之ヲ否定スル學者モ尠カラザレドモ「レントゲン」使用ニ際シテハ尙ホ其ノ特異感受性ニ對シテ相當ノ注意ヲ拂フベキ必要アラザルカ。

一 尋常性狼瘡 Lupus Vurgalis

五十六歳ノ女、農。

既往症 四十二三歳ノ時片側(左側)鼻腔内前庭ニ小ナル丘疹ヲ生ジ爾等ノ自覺症ナク初メハ意ニ介セザリシカドモ漸次増大シテ濕潤シ遂ニハ「レンズ」大ノ潰瘍ヲ作り分泌物アリテ痂皮ヲ作り時々鼻閉鎖ヲ來ス、次デ右側鼻腔内ニモ同様ノ發疹ヲ生ジ左側同様時々鼻閉鎖ヲ來スコトアリシト云フ其レヨリ三年位ヲ經テ左鼻翼外面ニ小ナ

大森—尋常性狼瘡ノ「レントゲン」治療並ニ「レントゲン」火傷ニ就テ

大森一尋常性癩瘡ノレントゲン「治療竝ニレントゲン」火傷ニ就テ

四九二

ル紅斑ヲ生ジ、其ノ中央稍々隆起シ丘疹様ヲ呈ス、該丘疹ハ漸次増大シテ浸潤ヲ呈シ遂ニ前者ト同ジク潰瘍ニ陥リ膿汁ヲ分泌シ爲メニ膿様痂皮ヲ作リタレバ醫師ノ門ヲ叩キシニ微毒トノ診断ヲ受ケ驅微法ヲ繼續セシモ更ニ治效ナク漸次増悪シテ鼻翼ヨリ頰部(左側)ニ蔓延シ終ニ左鼻翼前端ノ缺損ヲ來シタレバ當科ノ診ヲ受ケ(大正五年三月十三日)依テ直チニ入院治療ス。

其ノ當時ノ、症狀、診斷及療法(大正五年三月十四日)左ノ如シ。

顔面、鼻翼(殊ニ左側)ノ前端ハ缺損シ、鼻部ヨリ右側鼻翼、鼻根ニ互リ、又左側頰部モ黃色ノ固キ痂皮ヲ以テ被ハレ左頰部及鼻根部ニハ癩痕様萎縮アリ、痂皮ヲ剝離スレバ淡紅色ヲ呈セル疣狀肉芽面ヲ認メ膿漿性ノ分泌物アリ、鼻腔面モ同様ノ變化ヲ呈ス、鼻翼缺損部ハ鋸齒狀ヲ呈シ、頰部ニハ鼻部同様ノ結痂ヲ有スルモノ及其附近ニ粟粒大淡褐色ノ斑狀疹ヲ認ム、患者自覺症トシテ僅ニ氣道ノ閉塞ノタメ鼻呼吸ニ困難ナル外何等ノ訴フル處ナシ。「ツベルクリン」ノ反應陽性、發熱、局所ノ充血、「ワツセルマン」反應陰性ナリ。

療法 水銀石英燈ノ照射、「ヨード」劑ノ内服ヲ與フ、石英燈ノ照射ニヨリ結痂去リ分泌物大ニ減退ス、約一箇月間ノ治療ヲ加ヘ漸次佳良ナリシモ患者長時日ヲ要スルヲ厭ヒ歸宅ス。

大正七年三月三十日再來。

診スルニ諸症候増悪シテ右側頰部一圓ヲ犯シ左側半顔面ニ波及シ爲メニ左下眼瞼ハ皮膚萎縮ノ爲メニ下垂ス一見其ノ變貌ヲ呈セルニ驚ク。

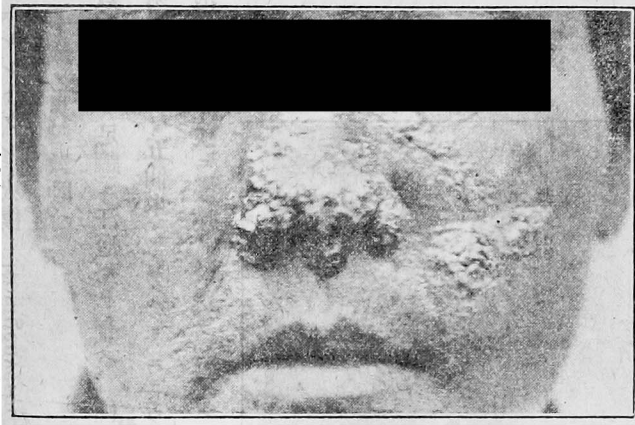
現在症 顔面鼻部ヲ中心トシテ左右頰部竝ニ左額顳部ニ黃色汚穢ナル結痂アリテ其ノ間諸處癩痕性萎縮アリテ左下眼瞼ハ下垂シ、左頰部中央ニハ特ニ著明ナル癩痕性萎縮アリ、結痂ヲ剝離スレバ前同様ノ肉芽狀潰瘍アリ鼻翼、鼻腔モ同様ノ潰瘍ヲ認ム。

療法 直チニ十%「デルマトール」軟膏ヲ以テ結痂ヲ緩和シ次デ「レントゲン」療法ヲ施ス。

「レントゲン」治療経過。

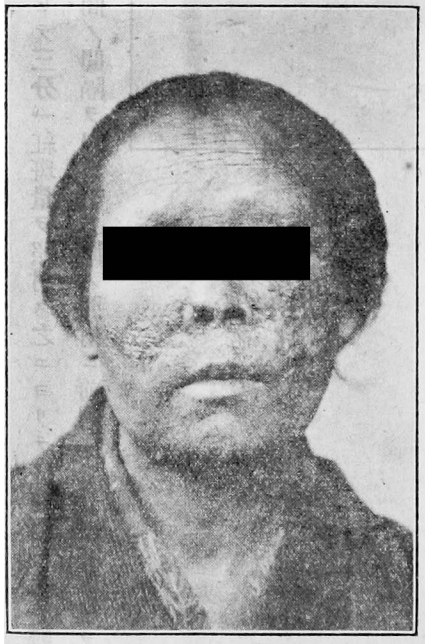
三月三十日第一回照射(「ミリメートルアルミニウム」板ヲ使用シ二分一紅斑量ヲ使用ス)第一回照射直後ハ別ニ何等ノ變化ナク一週日ヲ經ル頃ヨリ患者ノ結痂落離セルヲ認ム、二週日ノ間隔ヲ經テ第二回ノ照射ヲ前同様ニ施スニ分泌物ノ著シキ減退、潰瘍縮小浸潤ノ褪行ヲ認メタレバ五月十七日ニ至ル間ニ前後四回ノ照射ヲナス其ノ紅斑量四(一回ノ照射紅斑量平均二分一)ナリ、第四回照射後(大正七年五月二十日)別ニ副作用ノ著明ナルモノヲ認メズ患部ハ鼻翼ノ潰瘍ハ癩痕ヲ遺シテ全ク治癒シ氣道開通ス、鼻梁部頰部ノ浸潤去リ癩痕性萎縮ヲ呈シテ治ス。

第一圖



大正五年三月十三日
(第一回初診日 治療加ヘザルモ)

第二圖



大正七年五月七日
(第三回照射後)

大森一尋常性狼瘡ノ「レントゲン」治療竝ニ「レントゲン」火傷ニ就テ

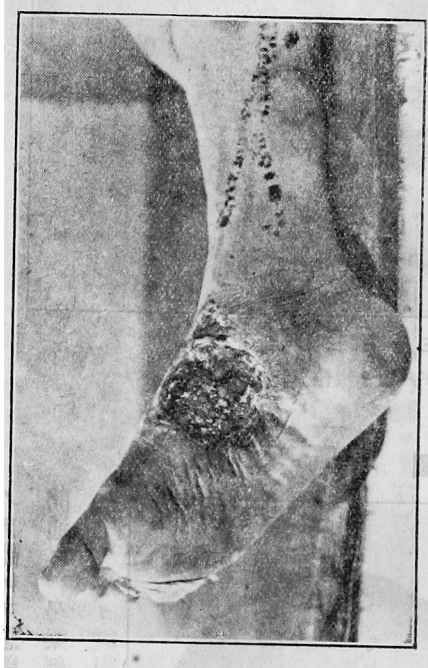
大森—尋常性狼瘡ノ「レントゲン」治療竝ニ「レントゲン」火傷ニ就テ

(二) 「レントゲン」火傷 Röntgenverbrennung

三十歳ノ男、教師。

數年前ヨリ足蹠ニ汗疱疹ヲ有ス、種々治療ヲ加フルモ治ニ至ラズ依テ大正六年四月二十八日右足蹠部ニ第一回照射トシテ○・五仙米ノ「アルミニウム」板ヲ用ヒテ三分一紅斑量ヲ照射ス之ニヨリテ汗疱疹ハ大ニ輕快シテ水泡疹ノ發生竝ニ搔痒ノ減退ヲ認メタリ依テ十四日間ノ間隔ヲ以テ第二回ノ照射ニ前同様二分一紅斑量ヲ施シタ

第 三 圖



リ其ノ後ノ經過ハ頗ル良好ナリシモ數日ニシテ照射部ニ略々照射管口ニ一致シタル大サニ僅カノ紅斑ヲ呈シ且色素ノ沈着著明ナルヲ認メタリ然レド別ニ何等ノ自覺的障礙ナキニヨリ其ノ儘トナシタルニ約十日位ヲ經テ潮紅増大シ水泡ノ形成シ該水泡ハ破壊シテ淺キ潰瘍ヲ作り尙ホ其ノ圓形ナル紅斑部ノ所々ニ黑色ノ小斑狀ヲ呈セル部生ゼシガ漸次其ノ部ヨリ壞死ヲ呈シテ遂ニハ初メノ紅斑部一圓潰瘍狀壞死ヲ呈シ周縁暗赤色ニシテ特異ノ「レントゲン」潰瘍トナリ著シキ疼痛ヲ覺ユルニ至レリ。依テ制腐法ヲ以テ所置シ「デルマトール」軟膏ヲ貼用セシモ該潰

瘍ハ日ト共ニ深層ヲ犯シテ邊緣鋸齒狀ヲ呈シ、不潔ナル肉芽面ヲ呈シ、疼痛烈シク、安眠シ得ザルニ至リ依テ生理的食鹽水ノ溫濕布ヲ貼シ次デハ緩和軟膏(硼酸軟膏、「イヒチオール」、「カンフル」軟膏等)ノ外用ヲ致シ時日ヲ費スモ更ニ何等ノ效果ナク然レバトテ始メ紅斑ヲ呈シタル部ヨリ以上ニハ進行スルコトモナク今日ニ及ベリ(大正七年五月十日)即チ一年ノ長日時ヲ經テ全ク何等ノ變化ナシ。

由是觀之ニ極メテ僅カノ「レントゲン」線ノ使用ニヨリ斯ノ如キ「レントゲン」火傷ヲ生ジタルハ實ニ稀有ノコト、云フベク、而モ其ノ治癒困難ナルハ誠ニ遺憾ノコトナリ。

大森一尋常性狼瘡ノ「レントゲン」治験並ニ「レントゲン」火傷ニ就テ